

毎週土曜日の午後、私は歩いて十分ほどのところにある「軒」の家に向かう。その家は古くて、入り口には大きなヤツデの鉢植えが置いてある。カラカラと戸を開けると、玄関のたたきには水が打ってあって、スーッと炭の匂いがする。庭の方からは、チヨロチヨロとかすかに水音が聞こえる。

私は、庭に面した静かな部屋に入り、畳に座って、お湯をわかし、お茶を点て、それを飲む。ただそれだけを繰り返す。

そんな週一回のお茶の稽古を、大学生のころから二十五年間続けてきた。

今でもしょっちゅう手順を間違える。「なぜこんなことをするんだらう」と、わけのわからないことがいっぱいある。足がしびれる。作法はややこしい。いつまでやれば、すべてがすっきりわかるようになるのか、① 見当も

A 「ねえ、お茶って、何がおもしろいの？、なんでそんなに長く続けているの？」  
こう、友達から聞かれることがある。

小学校五年生の時、親に連れられて、フェリー監督の『道』という映画を見た。貧しい旅芸人の話で、とにかく暗い。私はさっぱり意味がわからず、

「こんな映画のどこが名作なんだらう。デイズニーの方がよかったのに」

と、思った。ところが、十年後、大学生になって、再び映画を見て衝撃を受けた。「ジェルソミーナのテーマ」には聞き覚えがあったが、内容は初めて見たも同然だった。

『道』って、こういう映画だったのか！

胸かきむしられて、映画館の暗闇で、ポロポロ泣いた。

それから、私も恋をし、失恋の痛手を負った。仕事探しにつまずきながら、自分の居場所をさがし続けた。平凡ながらも十数年が過ぎた。三十代半ばになって、また『道』を見た。

「あれ？、こんなシーン、あったっけ？」

② 随所に、見えていなかったシーンや、聞こえていなかったセリフがいっぱいあった。無邪気なヒロイン、ジェルソミーナを演じるジュリエッタ・マシーナの③ 迫真の演技に、胸が張り裂けそうになった。自分が捨てた女の死を知って、夜の浜辺で身を震わせ慟哭する老いたザンパノは、もはやただの残酷な男ではなかった。「人間て悲しい」と思った。ダラダラと涙が止まらなかった。

④ フェリーニの『道』は、見るたびに「別もの」になった。見るたびに深くなっていた。

世の中には、「すぐわかるもの」と、「すぐにはわからないもの」の二種類がある。すぐわかるものは、一度通り過ぎればそれでいい。けれど、すぐにわからないものは、フェリーニの『道』のように、何度か行ったり来たりするうちに、後になって少しずつじわじわとわかりだし、「別もの」に変わっていく。そして、わかるたびに、自分が見ていたのは、全体の中のほんの断片にすぎなかったことに気づく。

「お茶」って、そういうものなのだ。

二十歳のとき、私は「お茶」をただの行儀作法としか思っていなかった。⑤ 鈍型にはめられるように、いい気持ちじゃなかった。それに、やってもやっても、何をしているのかわからない。一つのことになかなか覚えられないのに、その日その時の気候や天気に合わせて、道具の組み合わせや手順が変化する。季節が変われば、部屋全体の大胆な模様替えが起る。そういう茶室のサイクルを、何年も何年も⑥ モヤモヤしながら体で繰り返した。

すると、ある日突然、⑦ 雨が生ぬる匂い始めた。「あ、夕立が来る」と、思った。庭木を叩く雨粒が、今までとはちがう音に聞こえた。その直後、あたりにムワッと土の匂いがたちこめた。

それまでは、雨は「空から落ちてくる水」でしかなく、匂いなどなかった。土の匂いもしなかった。私は、ガラス瓶の中から外を眺めているようなものだった。そのガラスの覆いが取れて、季節が「匂い」や「音」という五感にうつたえ始めた。自分は、生まれた水辺の匂いを嗅ぎ分ける一匹のカエルのような季節の生きものなのだと、いうことを思い出した。

毎年、四月の上旬にはちゃんと桜が満開になり、六月半ばころから約束どおり雨が降り出す。そんな当たり前のことに、三十歳近くになって気づき愕然とした。

前は、季節には、「暑い季節」と「寒い季節」の二種類しかなかった。それがどんどん細かくなっていった。春は、最初にぼけが咲き、a、桃、それから桜が咲いた。葉桜になったころ、b の房が香り、満開のつじが終わると、空気がむつとし始め、梅雨のはしりの雨が降る。梅の実がふくらんで、水辺でc が咲き、紫陽花が咲いて、くちなしが甘く匂う。紫陽花が終わると、梅雨も上がって、「さくらんぼ」や「桃の実」が出回る。季節は折り重なるようにやってきて、空白というものがなかった。

「春夏秋冬」の四季は、古い暦では、二十四に分かれている。けれど、私にとってみれば実際は、⑧ お茶に通う毎週毎回がちがう季節だった。

どしゃぶりの日だった。雨の音にひたすら聴き入っていると、突然、⑨ 部屋が消えたような気がした。私はどしゃぶりの中にいた。雨を聴くうちに、やがて私が雨そのものになって、先生の家の庭木に降っていた。

(生きてる) って、こういうことだったのか！  
ザワザワと鳥肌が立った。

お茶を続けているうち、そんな瞬間が、定額預金の満期のように時々やってきた。何か特別なことをしたわけではない。どこにでもある二十代の人生を生き、平凡に三十代を生き、四十代を暮らしてきた。

その間に、自分でも気づかないうちに、⑩ 一滴一滴、コップに水がたまっていたのだ。コップがいっぱいになるまでは、なんの変化も起こらない。やがていっぱいになって、表面張力で盛り上がった水面に、ある日ある時、均衡を⑪ 一滴が落ちる。そのとたん、一気に水がコップの縁を流れ落ちたのだ。

もちろん、お茶を習っていないくたつて、私たちは、段階的に自覚を経験していく。たとえば、父親になった男性が、

「おやじが昔、お前にもいつかわかる、と言ってたけど、自分が子どもを持ってみて、ああ、こういうことだったのかとわかりました」  
などと口にする。

「病気をきっかけに、身のまわりの何でもありませんが、ものすごく愛おしく感じられるようになった」  
という人もいる。

人は時間の流れの中で目を開き、自分の成長を折々に発見していくのだ。だけど、余分なものを削ぎ落とし、「自分では見えない自分の成長」を実感させてくれるのが「お茶」だ。最初は自分が何をしているのかさっぱりわけがわからない。ある日、境に突然、視野が広がるところが、人生と重なるのだ。

すぐにはわからない代わりに、小さなコップ、大きなコップ、特大のコップの水があふれ、世界が広がる瞬間の醍醐味を、何度も何度も味わわせてくれる。

（森下典子『日は好日』より）

※ 別紙 2

は裏にあります。

受験番号

① 季語 季語は俳句にとってなくてはならないもの。平成九年に亡くなるまで多くの俳人を育てた上田五千石さんは、② 季語は感嘆詞を内蔵する言葉」と書かれています。「あゝ花」「おん雪」「あはれ」「秋風」といった特別な言葉なのだというのです。季語に感嘆詞が含まれるというのはとても説得力のある説明ですね。番組の中でも、多くの俳人が季語について熱く語られました。寺井谷子さんは、「季語は③ 春のしの中の宝石箱」「歳時記は言葉の森、結婚祝いに歳時記を贈ろう」とつねづねまわりの人にすすめていらつしやるのか。今井千鶴子さんは、「五感を澄ませて季語と向き合う、季語は俳句の生命」とおっしゃっています。

しかし、この季語についてはいろいろな不思議があります。まず、「季語」と「季題」のちがいはなんでしょうか。存在のようにホトトギスの方は「季語」ではなく「季題」といいます。これは、虚子の「俳句は季題を詠む文学だ」という言葉を受けています。

辞書などでは「季語」は「連歌・連句・俳句で句の……」を示すためによみこむように特に定められた語、季の詞。季題にはその「季語」と同じ意味のほかに、「俳句をつくる詠題としての季語」と説明されています。「季題」はどちらかという伝統的な和歌からの美意識を色濃く持っているものという印象があり、新興俳句以後の人は意識して「季語」というようです。厳密に言えばちがいがいもあり、印象もちがう「季語」と「季題」ですが、現在ではほぼ同じような意味合いでつかわれているといっている方がいいでしょう。

季語をめぐる不思議、つぎは「季重なり」です。季語が一句の中に二回も出てくるのは避けるべきとされています。添削コーナーでも、「季語がふたつありますね」と、言って当然のように選者の先生が直されます。ところが不思議なことに、有名な過去の名句には季重なりが意外に多いのです。

目には 青 葉 山 郵 公 は つ 鱈 山口素堂  
青葉の季節になるとつい口に出したくなる、どなたでも存じのこの句はなんと季語が三つも重なっています。もっとも素堂の時代は「青葉」は季語ではなかったとか。現代の感覚からすると、「目には」以外は全部季語で、いわば季語のてん盛り状態です。

① 啄 木 鳥 や 落 葉 を い そ ぐ 牧 の 木 々 水原秋櫻子  
この場合は、「啄木鳥」と「落葉」とふたつ季語があるうえ、ふたつの季語の季節がちがいます。こんなすばらしい句があるのだから、もう「季重なり」なんて気にしなくてもいいのではないかと思うのですが、私たち初心者にはむずかしいもの。

入選句の中に「季重なり」の句が入っていることもまれにあって、そんなときはゲストの方も一緒にみなで検討します。この場合、④ 主たる季語と従の季語がはつきりしていればよいであろうという判断になります。大事なのは核になる季語がしつかり詠まれているか、感動の焦点がはつきり定まっているかどうかです。

名人にとっては⑤ 取るに足らない「季重なり」も、初心者にはむずかしいもの。できれば「季重なり」は避け、ひとつの季語をしつかり見つけて詠むほうが、すつきり仕上がるようです。なにしろ、季語は感嘆詞を内蔵する言葉なのですから。

俳句にとっての「切れ」や「切字」の重要さは多くの人がくり返し述べていますが、いところから俳句には「切れ」が重大要素として登場したのでしよう。そもそもなぜ、俳句には「切れ」が必要なのでしょう。か。

俳句に「切字」が登場するのはとても早く、十四世紀の『菟玖波集』の中の俳句には「かな」という切字がとてよくつかわれているそうです。そして、『三冊子』に「芭蕉が「切字なくは、ほ句のすがたにあらず、……又、切字なくとも切る句あり」と語ったと記されています。

⑦ 関係にある「切字」の効果ですが、まずは形を整えること。そして、その切字によって、詠嘆や感動が広がります。切字は楽器の共鳴箱の様なものだという比喻をつかわれる方もありました。切るだけでなくそのあとの響きで余韻が生まれ、読者もその世界を共有できるわけですね。私は、音叉をコンと鳴らすと音がポーンと響くようなイメージを持っています。切字をつかって切れた直後に響きが残る感じ。です。

『草木花俳句塾』と題した特集番組で、斎藤夏風さんにこの「切れ」と「切字」について、お話しいただきました。その日塾生になったのは、若手女性落語家の春風亭鹿の子さんと私。斎藤さんは、

「落語やアナウンスでも聞きたいせつなしょう」

と、私たちに⑧ を向けます。鹿の子さんはよく師匠の春風亭柳昇さんから「間を盗め」といわれたそうです。つねに先輩や師の「間」を、傍らで聞いて会得するようになっているとか。アナウンスメントにこの「間」のたいせつさは言い出したらきりがありません。明読などの「読み」にとっても、スピーチなどの「話し」にとっても「間」はもっともたいせつな要素です。斎藤夏風さんのお話では、俳句の場合も「切字」による「間」が俳句を豊かなものにしてくれるとのこと。一句に広がりを持たせ、⑨ 冗漫な言葉を切つて調へをよくするのが切字です。

しかし、⑩ や「かな」「けり」などの切字は「諸刃の劍」だともおっしゃいます。切字をつかうことでなんとなく形は整うけれど、内容の浅いものになってしまふことも多いとか。切字をつかわずに切るというのたたいせつなことなのですよ。

その日は「切字」についてのお話を聞いたあと、塾生の鹿の子さんと私の句を鑑賞に添削していただきました。じつは、収録の一週間まえ「柿」という兼題を与えられ、うんうんうなりながら俳句をつくつて番組に臨んだのです。まず、私の句、

② 柿 の 実 や 病 む 母 の 目 を 悦 ば す 惠

このころ母の具合があまりよくないのですが、いただいた柿の実の赤さを見て、「瞬間覚醒」のように目を輝かせました。大正九年生まれの母は相当なお転婆だったらしく、柿の木に登って柿をとって食べた子どもころの話をしていたことがありました。柿の木は折れやすいから登るときは気をつけないといけないと言っています。私もかなりのお転婆でしたが、【A】柿の木に登ったことはありません。そんな、会話を思い出しながらつくつてみました。しかし、つかいすぎに注意するよう習ったばかりの「切字」の「や」が入っています。私が、

「切字の、や」のつかい方が失敗ですね」

と、斎藤さんに申し上げると、

「いや、⑪ そこに思いがあるのだから、失敗ということはありません。でも柿の印象を強く出したほうがいいかな」

と、つぎのように直してくださいました。

柿 輝 り て 病 む 母 の 目 を 悦 ば す

なるほど、買ってきた柿ではなく、庭の自然な柿の赤さに目を輝かした母の姿がより印象的になりました。「や」をつかった「切れ」は強けれども、平凡です。「輝りて」としたほうが具体的になったうえ、「切れ」が優しくなりました。斎藤さんは傍らにいて心が清らかなれるような方です。その斎藤さんに添削していただいて、句もとても優しい響きを持ったように思います。

③ 決 柿 や 隣 の 庭 に ほ ぼ 落 ち ぬ 春風亭鹿の子  
鹿の子さんがつくつてきた句は、なんとなく俳諧味があつていいなあと私は感じました。甘柿だったら悔しいけれど、渋柿だからいいやなんて見つけている作者の姿も浮かんで思わず吹き出してしまいました。しかし、この句にも切字の「や」があります。

④ 渋 柿 の あ ま た 隣 の 庭 に 落 つ 鹿の子  
こちらも「I」「II」をつかわず、「II」「II」と重ね最後の「落つ」で切る添削です。

斎藤さんに添削していただいてすつきりいい気分。添削されるのはこんなに気持ちがいいものかと驚きました。たいせつなのは「切れ」であつて、「切字」ではなかったのです。俳句にとって「切れ」はたいせつな支柱ですが、「切字」は【B】必要というわけではない。名詞で止めることもできるし、形容詞の終止形でも止まる。動詞の命令形も有効な切れを生み、余韻のある間につながります。

\* ホトトギスの方——俳句雑誌『ホトトギス』を活動の場とする人々。

(好本惠)「俳句とめぐりあう幸せ」より



問一 次の各文中の空らんにあふさわしい漢字を答えなさい。

1

法案に [ ] イ

を唱える。

少しも [ ] イ

に介さない。

4

機知に [ ] ト

む。

7

左後方に  
良いパスを [ ] ホウ

る。

10

一線を [ ] シリゾ

く。

12

気が [ ] ス

まない。

2

難しい作業に [ ] ネ

をあげる。

ささいな  
ことを [ ] ネ

に持つ。

5

全集を [ ] ア

む。

8

のびをした  
ねこの背中が [ ] ソ

る。

11

見事な演技に  
舌を [ ] マ

く。

13

虫が [ ] ス

かない。

3

[ ] ヒ

の打ちどころがない出来ばえ。

[ ] ヒ

を見るよりも明らかな結末。

6

豊かな心を [ ] ハグク

む。

9

日ざしが目を [ ] イ

る。

- 1 社 [ ]
- 2 管 [ ]
- 3 頂 [ ]
- 4 筋 [ ]

問二 次の漢字の訓読みを答えなさい。ただし、名詞として読むこと。

